

白金葎

1月号



令和2年1月発行 第105号

定例会会（毎月第二金曜日）

二月二十一日（金） 第五正午～三時…当季雑詠五句

三月二十日（金） ホール正午～三時…当季雑詠五句

四月十七日（金） 第五正午～三時…当季雑詠五句

一月例会旬会報

（20 / 1 / 17 8名欠7）

光成高志

六根の椎の大樹に初詣

初空へ鷗渦巻き高揚る

新玉のポルカのリズム維納ウィーンより

正月三日上野駅中人通り

老人の葺ふきあへず不合社の御歩射おぶしやかな

光 みち

初日の出待つ遠くから貨車の音

筑波嶺の殊に紫大巨

瘤白鳥涎垂らして寄ってくる

病得て書くこと増ゆる初日記

縫初や猫と鼠のアツプリケ

佐藤宏之助

べか舟の舳先に立ちて賀詞交す

鼻が鳴く篤農の屋敷林

福藁を地の見えぬまで敷きつめて

天井の柱目を走る嫁が君

四半世紀振りの披講や初句会

田宮敦子

のしいかを作る親父の冬帽子

女正月稲荷の狐細身なり

鳩と鷗集まる河原冬うらら

遊女の墓供えられたる水仙花

子供らと一、二、三と大根ぬく

増田陽一

独酌や冬蝶を呼ぶ術もなし

去年今年鴉のみちは変らざり

霜夜の夢に悔恨のヴェルレーヌ（節に、お前は若い時から何してたんだ）

共に越年枯木に潜むクワガタよ

手賀沼をとぶシベリアの小木苑こみみずく

日向ぼこ寄り添うだけの介護かな

お年玉年々増額笑みも増す

年始客大人とまがふ孫の靴

元旦に天使の梯子差し込みぬ

仏壇に手を合わせ受くお年玉

ロボットの御慶曰ふ目鼻立

除夜の鐘谷中浅草はて千住

振袖をたくし上げたる射初かな

爺と婆同じ大きさ雑煮椀

嫁が君豊洲豊葦原夢見る

成田山詣炬燵に遠眺め

そののちの男の一生雪女

浅野正美

草団子練る掌を染めて春隣(柴又)

幾年月逢はぬ淋しさ嫁が君

又探す着ぶくれてゐる中のもの

空に帰す身を生ききて屠蘇祝ふ

蠟梅や枯葉を残し咲き初める

初凧や蠟梅薫る村の路

初凧や眼路の果てまで沼の水

蠟梅や空の青さに金の鈴

飯田孝三

土屋 健

御手洗の水清々し初詣

頭越し投げる賽銭初詣

初神籤凶となり又神籤買う

注連飾りの稲穂ついでむ雀達

箱根駅伝シードを挟み悲喜こもこも

松村幸一

佐々木由紀子

ろう梅や薄日の中にひと日暮れ

手賀沼に沈む夕日や冬の富士

日の射して目白来てゐる冬椿
手作りの絵はがきで来る賀状かな
鈴本の寄席で笑ふや年新た

橋ことり

日当たりの梅の花芽に風通る
一畝に冬眠蚯蚓驚かす
甘藍が畑の中で育ちをり

槇田輝子

店先にねずみのやうな蕪あり

新しき首輪の犬と初詣

母と煮て黒豆光る台所

新春の白きエプロン母傘寿

兄と乾すビール熱爛寝正月

槇田健三

いつの間に月日のたちて日脚伸び
ひとり居もおせち以上にたのしけれ
餅を見て艶のなき肌その通り
一句鑑賞

光成高志

日向ぼこ寄り添うだけの介護かな

正美

延々と繋がる車初詣

拝殿に賽銭投げる初詣

布ひろげ賽銭受ける初社

初参り妻を偲んで十七年

尾崎 昇

店先にねずみのやうな蕪あり

ことり

八百屋とかスーパーの店先に旬の野菜が並べられてある。その中から白鼠のような蕪を見付けたのだ。この鼠は福の神の大黒の使者といわれ、古来吉兆とされたのを踏まえている。蕪を見るとなるほど白鼠の貌もしつぽあるわと気づいた子年の発見です。或いは㊦をよくお読みになつて連想されたのかもしれない。

枇杷の花揺れる葉つばに風抜ける
吾庭の南に咲ける枇杷の花



手賀沼をとぶシベリアの小木菟

陽一

116 朝日千葉版に写真(上図)付きで手賀沼に飛来したコミミズクの記事が載った。これをそのまま句にされたもの。小木菟を見付けた写真家が県内外から百人以上集まり望遠カメラを並べている写真も掲載されている。我孫子市は鳥の博物館もあり、山階鳥類研究所もあり手賀沼周辺には鴨百合鷗瘤白鳥鶴など水鳥がゐる十一月初旬には全国バードフェスティバルと英語で名付けた祭が行われる。私の家の前方の田圃、手賀川にはこれらの水鳥が住んでゐて私の犬連れ散歩道になっている。沢瀉や終の住み家は水の郷(みち)がある。一寸PRしました。

由紀子

冬椿蜜を啄む目白かな(高志)は我孫子日記に割愛した私の元日の句。掲句はその風景を別な視点から描写しています。藪の中寒椿さき目白なき(田中冬三)薄き日の濃くなる道や冬椿(増田龍雨)のけぞって鴨が花吸ふ寒椿(池内けい吾)位が見つかった。冬椿は境涯にもよく取り合わせられる便利な季語のようだが、それだけ写生句は難しい。目白は秋の季語だという人はとらないでしょう。

一句鑑賞

磯目健二

独酌や冬蝶を呼ぶ術もなし

陽一

独酌といえば月を友に飲み月との再会を期す李白の「月下独酌」の絶唱を想起するが、脳裏に冬蝶を思い浮かべて独り飲むというこの句は孤独がさらに深い。人生の儚さを「胡蝶の夢」というが、西洋では蝶は死者の魂と考えられてきた。「冬蝶」には順境から衰亡への有為転変の哀情が感じられ、懐かしい亡き人のメタファとここでは解したい。過去を回顧しそれが今は届かぬ遠い夢となったことを痛惜し淋しい酒を飲んでいたのである。

嫁が君豊洲に豊葦原の夢見る

孝三

江戸日本橋魚河岸が大震災で築地へ移り八十三年後、隣接埋立地深川豊洲へ移転。築地市場は鼠の巣窟だったが、その大群は何処へ。きつと鼠たちは古代人が列島に建国したように新しい王国を豊洲に夢見ているにちがいない。豊葦原は古代日本の美称である。

鼻が鳴く篤農の屋敷林

宏之助

農本主義の江戸期以降、農業改善をめざす日本独特の農字が発達し、その下で各地の篤農家が農村をリードした。主に豪農層でその本拠は、長屋門を構え屋敷林を背負う壮大だった。鬱蒼とした屋敷林に聳える大樹には鼻が棲みついでいて「ゴロスケ、ホーホー」と鳴いていた。農業の衰退著しい現代では、農村の有り様も大きく変わり「篤農」という言葉も死語に近くなっている。

草団子鍊る掌を染めて春隣（柴又）

幸一

「男はつらいよ」の柴又の団子屋とらやは実存する高木屋老舗がモデルだ。映画では寅次郎の叔父で店主の竜造が従業員と蓬餅を練り掌を緑に染めて、名物の草団子を作る。江戸川の土手で蓬の若草を摘む春には家庭でも見られる光景。渥美清は「風天」の俳号を持つ俳人で「大根のサククリ切れて手の赤く」の句がある。

日向ほこより添うだけの介護かな

正美

老親に寄り添って見守るほか何もできないのが子にとって切ないのだが、親の方は風の日だまりで暖まり傍らに家族がいてくれるだけで充分安楽な気分になっている。太陽の暖かさと家族愛の情景が目に浮かぶ、切なくてほのぼのとした温かい句である。

受贈誌（令和二年一月号）

去年今年コンビニナートは煙吐く（東京クラブ1月号）

栄

袖触れて一揖したり初詣

（Ⅱ）

璃子

歳旦のひかり賜はり大噴水

（Ⅱ）

武子

街角に異国訛りの御慶かな

（Ⅱ）

文男

芭蕉のかるみ以後（59）

光成高志

貞享三年閏二月、青蟾堂仙化の主催で、芭蕉庵に門人各

自蛙の句を持寄り衆議判を以て左右二十番の発句合を行ひ、仙化之を筆録して「可般圖合」の一巻を成す。その

内三番を抄出する。第一番、左

古池や蛙飛びこむ水の音

右

芭蕉

いたいけに蝦つくばふ浮葉哉

仙化

此ふたかはづを何となく設けたるに、四となり六と成りて二巻にみちぬ、かみにたち下におく品、おのくあらそふ事なかるべし。

第五番 左

簑うりが去年より見たる蛙哉

李下

右 勝

一畦はしばし鳴きやむ蛙哉

去来

左の句、去年より見たる水鶏かなと申さまほし、早苗の頃の雨をたのみて、簑うりの風情猶たくみにや侍るべき。右、田蛙をへだつる作意濃勢也、閑々蛙聲などいふ句もたよりあるにや、長し是群蛙苦々^{シヨロシ}相混、有^レ時作^二不平^ノ鳴^一といふ句を得て以て力とし、勝

第十八番 左

山井や墨のたもとに汲蛙

杉風

右

尾は落ちてまだ鳴あへぬ蛙かな

蚊足

山の井の蛙、墨のたもとにくまれたる心ことば、幽玄にして哀ふかし、水汲僧のすがた、山井のありあさま、岩などのたゞずまひ

も冷じからず、花もなき藤のちひさきが、松にかゝりて清水のうへにさしおほひたらんなど、さながら見る心地せらるゝぞ、詞の外に心あふれたる所ならん。右、日影あたゝかに、小田の水ぬるく、芹なづなやうの草ものびて、蝶など飛ぶかふあたり、かへる子のやゝ大きになりたるけしき、時に叶ひたらん風俗を以為し持。

蛙合出句者 四十名

芭蕉・仙化・素堂・文鱗・嵐蘭・孤屋・翠紅・濁子・李下・去来・友五・琪樹・朱紘・紅林・芳重・扇雪・琴風・水友・徒南・枳風・全峰・流水・嵐雪・破笠・北鯉・コ齋・千里・山店・橘衰・蕉筆・舉白・かくし・宗波・嵐竹・杉風・蚊足・ト宅・峽水・曾良・基角
追加 一名

鹿島に詣侍る頃、真間の継はしにて

継橋の案内顔也飛蛙

不卜

頃日會 深川芭蕉庵「而群蛙鳴句以衆議判」而馳「禿筆」、青蟾堂
仙化子撰焉乎

印

印

貞享三丙寅歲閏三月 日

右の文末の日付が入っていないが、次に紹介する芭蕉書簡には閏二月十日とあるので、蛙合は三月初旬に行われたものだ。芭蕉の書簡は、芳賀一品に托し、去来の蛙の句を賞めている状となっている。京にいた去来から度々手紙を寄せられていたその返信。内容は返事の遅れ

を謝し、去来の俳句精進を賞し、「蛙合」に入集した句の好評を記し、上洛の予定を知らせたもの。去来はまだ芭蕉に入門していないが、その直前のものである。手紙は候文で書いてあるので、少しでも読みやすく読者に届ける為、私の訳文で書いてみる。芳賀一品、老母見舞に登られるに托して一筆啓上いたします。ますます無事にごさいますでしょうか、承りたく存じます。ここものと和田氏・基角・野蕉（それがし）・恙なくしております。誠に度々言伝を頂き、先日又あなた様の手紙を頂き、御厚志ご親切の段、誠に浅からず感心致す事で御座います。折節はご書状もと存じ、心がけも御座いますけれども、蚊足より委細の御通じています上はと存じますが、重ね重ねてと便り延び延びになって過ぎ、心外の至り、私の方の考えが浅きに似たと言われても仕方ありません。お秀作度々見せてもらい、千里へだつといへども、俳諧の心が一に叶う時は割符がぴったり一致したようで、毫髪も入れる処は之無く、最近のあなたは俳諧の悟心明らかにされていることを理解いたしました。そなたの連衆、特に文鱗・李下・よろこぶこと大でありましょう。この度蛙之御作の意、そなたに云い尽したる様に存じますが、又々珍しきお着想是又人々驚き入り申しました。此秋冬晩夏の内に上京、嵯峨野の御草庵にて親話尽し申すべく

と頼もしく存じております。嵯峨へ、そなた様へ参りますことは京都には沙汰なきがよいと思ひます。

閏三月十日 芭蕉桃青書 去来雅伯 人々御中

このような書簡を打つていて感動するのは、心中を的確に伝えてそれぞれが心の交流をしていることである。漢文が短いといえども詞に含まれる意味が豊富で特に候文は読んで読んでみれば段々分かつてくる。それが美しい文章だと思われてくる。先の平家物語の一節などもそうであるし、和文ではあるが源氏物語なども何度も読めば意味が自ずと通じてくる。論語などもそうである。芭蕉が賞めた去来の句は、前頁に示した「一畦はしほし鳴きやむ蛙哉」である。判詞に云う。左の句は、「去年より見たる水鶏かな」としたいところ。早苗の頃の雨をあてにする養売りとした方が巧みであろう。そうすると、夏の季語の「水鶏」がいい。右の句は、田畦をへだてた作意がこまやかである。「閑々蛙声」などという句にもつながる。「長是群蛙苦相混有時也作不平鳴」という句も力になるので、よつて右の勝。文鱗や李下の京都の去来の連衆の句で蛙の句は云い尽されていると思つていたが去来の一畦の句の珍しき着想には皆驚き入りました、と言つて賞めているのである。十八番の判詞はよく読めば素晴らしい想像力と鑑賞力がよく我々に伝わってくる。花もな

き藤の小さい花が松に懸かつて清水の上に差し覆う様などをさながら見る思いがするというのである。桜の花の次に優美なのは藤の花であるのは源氏物語にも出てくるし、その元は白楽天の詩にあるらしいのだ。芭蕉の発句にすぐに触れないのは、古池の句が蛙合という歌合に準じた庶民の遊びの一種になっているその発句に過ぎなかつたということを伝えたいが為である。外にも連衆の句は延々と続くのだがそれらを読んで行つても段々古池や蛙飛びこむ水の音がなんとも言えない響を持つて心ならずしと伝わってくる。それは何故であろうか。後世の俳人や文士達によつて評論されたことを振り返つてみる。栗田勇著の中ではこの句にさまざまの解釈の仕方があるとして鑑賞日本古典文学大系の安倍能成、幸田露伴他の諸氏の解釈を紹介している。刹那の中に永遠の閑寂な相を把んだもの、電光の閃いて一点を照らす趣、最近では長谷川權の現実の音を聞いて古池という心の世界を開いた。江戸時代の、古人は蛙の声のみ詠じ来れるに其音をきゝ出してはじめて正風を發起せられたり、寂の字余情なりというのは天明四年（一七八四）刊行の朱紫（真山著）である。俳諧一串抄（六平齋亦夢著）天保元年（一八三〇）刊行の俳論書にある「蛙の句にあらざ、古池の句なり、音の字の何となく覚束なき所の風情あれば、悟道

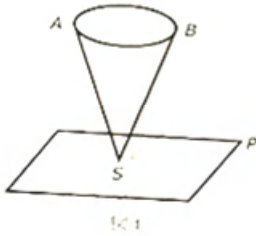
を解の徒、此句を借り用ふる事は有べけれど、夫もたゞ一旦のしめ草にして、此句中に悟道の有にはあらず」と言っている。最も有名な解釈は支考の「葛の松原」（二六九二）の中の記述である。その原文はあまりにも有名なので殆どを省略してここは私なりの要約を書いてこの項を通過したい。支考の書いているのは蛙飛びこむ水の音を師が思いつかれた折りにまたま弟子の基角が傍にいて、山吹という五文字を頭にしたらいかかかと聊かをよすけ侍り（ませた調子で）申ししたが、唯古池とは定まりぬ、とある。支考の分析は、「山吹といふ五文字は風流にしてはなやかなれど、古池という五文字は質素にして實也。實は古今の眞道なればならし、されど花實の二つはその時に臨める物ならし、柿本人丸のひとりかもねむと読める歌は、かばかりにてやみなむもつたなし、定家の卿もこの筋に遊び給ふとは聞侍し也。しかるを、やまぶきをのうれしき五文字を捨て、唯古池となし給へる心こそあさからね。頓阿法師は風月の情に過ぎたりとて、兼好・淨弁のいさめ給へるとかや、誠に殊勝の友なり。」山吹は黄色の五弁花が五月頃咲く。山間の川沿いによく見られ、上高地で「激つ瀬に山吹咲きて垂れぬたり」という句を作った思い出があるが、水と取り合わずと山吹がいっそうあはれを起こさせる。蛙飛びこむ水の音には違和感を

私でも感ずる。古池は質素にして実也というのは歌学に於ける花実論が論理的基礎になっている。支考の芭蕉没後に書かれた続五論（元禄十一年一六九八）に「心を実におきて、言葉の花にあそぶべき、花実相應の風雅のたつき」とあり、更に花実を虚実の論に結びつけて、經驗的眞実としての実（心）を文学的眞実としての花（詞）へと昇華させることが必要と説いたのであった。「実に居て虚を行ふべからず、虚に居て実を行ふべし」という俳論もここから出ている。この詞も分りにくい言葉であるが、単に表現方法の範囲を超えて世界観人生観にまで敷衍できるところがある。故森澄雄さんなんかは人生は虚であつて皆いずれは死んでしまうのだから、人生に何の意味はない。本当は。そういう意味のない人生で俳句を作つているのだから、そこに賭けて覚悟を持つてやる。大きな虚に居てそこに覚悟しながら今の今を精一杯生きて実をつくさねばならないと言つて連衆を励ましていたらしい。教師つぼいです。私も卒の結婚式のスピーチでこれを話したことがある。以上はまたも蛇足。次の、實は古今の眞道なればならし、の断定文は何を言つているのか。こも栗田著を孫引用すれば、先の続五論の花実篇に「詩歌といふは道也。道に花実あるべし。実は道のみちにして、人のはなるべからざる道をいふ也。華は道の文章に

して、神のこゝろをもやはらげぬべし」とあると書いてある。これは先の仏頂の項で解説した萬法帰一のことだと思ふ。この一というのが老子では道(タオ Tao)といい、道は万物生成の原理であるが空っぽの概念のことをいい、そこから「有」が生み出されるとされます。道は自然に法のつとる、即ちすべてのことは自然にのつとっている。春夏秋冬の移り変わりのように、人間の行くべき道も自然にのつとるのがよい。その光を和し、その塵に同ず、即ちきらびやかな才知などの光はぼかして、目立たないよう俗世間の中に同化するがよい。老子の「道」の思想をさらに深めたのが莊子そうしです。莊子の思想を著わした莊子そうしは、道家思想の全志谷を備えているとされます。莊子の思想には、俗世間を離れ、無為自然の世界に遊ぶ姿勢である逍遙遊しょうようゆうが根底にあります。逍遙遊とは、とらわれのない自由な境地に心を遊ばせるという意味です。自らその適を適とす。自分の本当の心に適したものを求めるべきである。自適ということが真人のすがたである。この思想を芭蕉は仏頂から学んで自得しその後の生き方に舵を切ったのだと思います。支考のされど花實以下は何を言っているのか。花(詞)も實(心)もその場に臨んでつかむものであるに違いない。柿本人麻呂のあの百人一首にある歌「あしびきの山鳥の尾のしだ

り尾のながながし夜をひとりかも寝む」はこれだけの事できまりをつけたらしいのはまずいのではないか。定家卿もこの恋歌の筋に遊び給うたと聞いております。そういう訳で山吹のうれしき五文字を捨てて唯古池となされた心こそ浅いものではありません。頓阿法師は風月の情に過ぎていると、兼好・淨弁のいさめ給えととか、誠に勝れたありがたい友です。というふうには訳してみた。定家が恋歌を最も得意としたということは新古今集を読めば、誰でも分かることであるが、芭蕉は華やかな世界を捨て唯古池とした心が大変深いものであると、こういう文章を書いていると自然に分かってくる。莊子の中に不言之言を聞く、声なき声を聞くという人生態度が出てくるが、芭蕉は黙って古池とした声なき声を聞いたのであると思ふ。三冊子の中にも草にあられたる中より蛙がはいる響に俳諧を聞付けたり。見るに有。聞に有。作者感るや句と成る所は則俳諧の実也。とある。芭蕉の句のここに至るまでの音や声を詠った句をぎっと見ただけかなりの数になることに気づいた。蕉風開眼は莊子によって見るに有、聞くに有の音であったのだ。深川に移住時の櫓の声波を打ってから、天和元年の芭蕉野分して、同三年の霰聞くや、野ざらし紀行の中の編弓や琵琶になぐさむ、同、砧打ちて我に聞かせよや坊が妻、同、露とくと

くのとくどくの清水、同、琵琶行の夜や三味線の音霰、同、いかめしき音や霰の檜木笠、同、草枕犬も時雨るるか夜の声、同、海暮れて鴨の声ほのかに白し、同、水取りや氷の僧の沓の音、そして貞享三年の古池や蛙飛びこむ水の音になる。その後は笈の小文の旅に出る前の素堂に使わした、糞虫の音を聞きに来よ草の庵がある。ここまで書いて来て先にも触れたが、古池やの句は、蛙飛びこむ水の音によつて、古池の存在に気づきその瞬間から後は何事もなかった如く静まりかえつた時間を詠つたものではないか。私はそう解釈する。だから古池を詠つた句であつて、その音で悟りを開いたという悟道の有るにはあらずとした俳諧一串抄の説に同感である。その上に私はベルグソンの物質と記憶を読んでハタと膝を打つた文章に出会つた。



動のままであるのに対して、あらゆる瞬間に私の現在を

これは上図で説明されている時間と記憶の文章で、性急に言つてしまえば、図のS点を詠つた句であると思う。この図のSABは私の記憶のなかに蓄積された想起の全体を表す。過去の中に据えられた底面ABは不

動く頂点Sは絶えず前進しており、同様に宇宙についての私の現在の表象の動的平面Pに絶えず触れている。身体イメージはSに凝縮される。そして、平面Pの一部をなしているこのイメージは平面を構成しているすべてのイメージから発する諸作用を受け取ると共に返しているだけだ。原文ではイメージは仏語でイメージと書かれてある。この本は大変難しいので、何回も読まなければ分からないし、また何回読んでも分からないところが多い。この現在というものは存在しない。そう考へているときにはそれはもう過ぎ去っている。反対にあなたが、具体的に意識によつて実際に生きられている現在は大部分が直前の過去のうちに存する。光についても可能な限り最も短い知覚が持続するほんの一瞬の間に、何兆もの振動が生じていたのであり、その最初の振動は最後のものから桁外れに多く分割される間隔によつて区別されている。あなたの知覚はどれほど瞬間的であろうと、このように数え切れないほど多くの思い出された諸要素から構成されているのであり、実をいうと全ての知覚はすでに記憶なのである。われわれは実際には過去しか知覚していない。このS点を知覚するには理屈で追っかけても達するものではない。パッと頓悟する如く自由無碍の着想が必要である。それは禪でいう祖師禪であつて、擦着

すれば則転ず。かならずしも理知にかゝはらねば、寸心
かけずといへるたぐひなるべしという支考の証言を残し
ているがそれがそれである。蛙飛びこむ水の音によって
その時間を切断し、音によってS点の前後即ち未来と過
去の只今を拡大して宇宙を掴む境地を目指したのではな
いか。三島由紀夫の豊穰の海第二巻の暁の寺に似たよう
な唯識論の分析が出てくる。S点は阿頼耶識だと云って
いる。実有は現在の一刹那のみであるとか、小説とは云
えぬほど唯識論の論文のような文章に往生した覚えがあ
る。しかも、この時間相については道元の正法眼蔵にも
出てくる。

俳窓評論纂

*ちるさんより山岡草太君の卒論が届いた。中三で卒論と
か、がん患者の家族の精神的苦痛を和らげるために「
がん哲学外来」サレー・フォー・ライフ」の活動から探る「
が題と副題。冒頭の文章に樋野興夫医師の会話があつて読
む意欲をそそる。癌に罹った本人の苦痛ではなくその家族
や友人の精神的苦痛に焦点を当てている。がん哲学外来を
病院に設けて患者は無論その類縁の為の交流の場を作った
医者だ。がん哲学とは南原繁の政治哲学と吉田富三のがん
学をドッキングしたものである。科学としての癌学に哲学
的な考えを取り入れた分野があるという。同じような趣

旨でアメリカではリレー・フォー・ライフが発足しているとか
直訳すると生きる為のリレーである。がんになった人は二
十四時間がんと向き合っているのだから、いわばトラックを
二十四時間走り続けるに等しく、そういう人達への寄付を
募り癌の人々と思いを共有し支援するという活動である。
現在では世界約三十九国四五〇〇カ所年間寄付は二〇〇
億円昨年の日本での参加者は六六〇〇〇〇人へのぼるとい
う。以上は活動団体についてであるが、実際のカウンセラー
として、アメリカのチャプレンと日本のビハラ僧の活動に
触れている。僧侶に限らず災害現場などの公的な場で被災
者やその家族の苦悩に寄り添う臨床宗教師があるとも。
がん哲学外来ではメディカルカフェというなんでも話せるカ
フェを設けている。草太君はお茶の水のここに参加した。
あのような場を提供することこそこの活動の主たるものだ
と書いている。東京には四十三カ所その場があるとか。日
本のリレーフォーライフは二十四時間参加者が歩いて希望
を話し合う。電話相談もある。がん相談ホットラインとい
う。がん患者への接し方についてはとかくこじれたりしやす
いので、丸ごと本人の意思を受け入れることが肝心であり、
樋野医師は新しいものを見付けてがんの優先順位を下げて
下さいとアドバイスするという。死を見つめている人に何が
できよう、ただ寄り添う、何かをするというより、そこに
居ること、最後まで見捨てないこと、いつも味方であること
を感じ取ってもらうことが生きてゆく力になる。正論より

配慮だと。最後にこの卒論の結論として先に述べたような活動を全国的に広めていくところが癌患者の家族の精神的負担を軽くすることに寄与すると結んでいる。

* 1.9 朝日生活欄に福島智(57)の「命に序列はない」様々な出会いから気づく が載った。光成夫人と写真つき記事。重い障害のある人を殺戮した被告と面会した感想文。同氏は現在全盲ろうになり、漆黒無音の世界にいる。始めからではなく、健常、全盲、全盲ろうという二つの状態を生きて来た人です。人間の属性に関わらず命の価値は同じだと気づかされていく道のりであった。どうにかやってこられたのは、一つには指點学というコミュニケーション手段があり、それを用いて支えて呉れる人がいたからです云々。

* 1.4 天声人語にAI一茶くんというAIに句と写真を覚え込ませたAI句を示している。北大の若い教授がいわば遊びでやったものを、天声人語さんは大まじめに取り上げている。言葉あそびと俳句は似て非なるものを分かつていないようだ。でも俳句はそういう形式をもった文芸ではある。

お便り広場(賀状俳句・賀状絵他)

光成君 80 歳近くになり、視力もほとんどなくなり、日々をもたもた過している間に一年の(無沙汰になり)免なさい。俳句のことは浮かんで消え、頭も冴え

なくなりました。ここに俳句誌の代金に添え、気持ちだけの物を送らせていただきます。(12/26 輝子)

今はゆつくり体に気をつかい過ぎ(しましよう。(拓也)気晴らしになればと思ひ塗絵を買って見ました。よかつたら使ってください。(恭子)メリークリスマス 体に気をつけて手術がんばって!!(里樹)体の調子はどう? ゆつくり休んでクリスマス楽しもう! 手術がんばってね。応えんしてよ。(なな)

賀状俳句(1.1)

明日へと繋がる子らと新年云

根本大治

つつが問ふ顔の浮かぶや年賀状

小俣たか子

雪積むや障子の穴を見てあれば

武者昭七

百歳になつてあました初夢でした

松村幸一

屠蘇祝う喜寿と子歳の夫婦劇

高田正義

新緑や塗装終えたる壁光る

鈴木早百合

もし五年後に命あらば、初を正と替えるつもりです

(幸一)。今年もよろしくお願ひします。会報における主催の文業に敬服しています。源氏でも同行ありがたいです(健二)。私は今年も囲碁とウォーキングを楽しみ、先輩から勧められた俳句の勉強をしたいと思つています。

(中略)俳句の指導よろしくお願ひ致します(健)。昨年九月の喜寿の同窓会に出席致しました。貴方の俳句についての御意見等ミサ子さんのお手許に有る由後で拝見さ

せと言えなくて。俳句吟行とも言えない旅を十月にあずさの号に乗って南アルプスの山麓に酒醸造を尋ねました。秋の好天の中生涯の宝として心に納めました(勝子)。

昨年はいろいろな災害が千葉の方であったことずつと心に兄の所はどうだったのだろうか・・と心に思いつつ終つてしまいい今年になつてしまいました。皆様変わりなく良き年を迎え元気で今年も俳句にハマっている兄さんはいつまでも魅力的ですね。体には呉々も注意して日々上機嫌に過ごしている皆様をお祈りしています。私は元気で一日一日大切に送つていきたいと思つております(峯子)。昨年はずっとさんただいて食べています。俳句の本を読まさせていただきました。電話したのですが留守でした。哲治とけんかしながらも仲よく暮していますのでご心配なく。身体に気をつけて本年も頑張りましょう(澄子)。

お父様おやすみマスク作りしました。寒くなつてきたのでインフルエンザに気をつけてご自愛ください。(山墨子) 正月もあわただしく過ぎてちよつと落ちつきました。小寒に入つても少し暖かい日が続いております。今年はお孫が10人になりました。中学一年から小学四年三年一年と令和生まれまで男五人女五人大じいしの家に来るのは楽しみがあつてくるのだ。それに答えてやりました。皆喜んで帰りました。私も元気で年越しができました。これからは自分のできること少しずつやりながら

つくりと行こうと考えています。そちら二人共のご自愛をお祈り致します。以上終了。宮内の一宮さんに初詣しました。(113 健二)

年が明けてすでに半月になりますが、年末になります。が、年末から続きゆつたり落ち着ける日がまだ来ず、時間の使い方の下手なことに変わりなく、どうしたものかと悩みの種です。おめでとうと云われたくない九十七歳になつてしまいました。今しばらく何かとお世話になります。受賞句：日焼けした背中二面世界地図(小一) スズムシのひらいた羽はハートがた(小四) 正座して礼儀止しき雨蛙(中) 応募数 184 句、入賞句 48 句とありました。頼もしい子供達ですね。(115 璃子)

敏子さん無事に退院なされた由よかったですね。小生年末から仕事が一ヶ月遅れていておまけに、パソコンがまた故障して年賀状も欠礼しております。欠席投句よろしくお願ひ申上げます。(116 陽二)

新木のジイジ、バアバ(省略)お母さんお体の具合いかがですか?まだまだ寒い日が続きますし、どうかゆつくり体を休めてくださいね。お父さんも家事を頑張りすぎないように。(省略)。(118 なな・里樹・恭子)



三原捷宏



皿海達哉



伊藤安徳



大目恭子



尾崎昇



鈴木智子



藤田朋子



鈴木早百合



土田徳子

賀状版画一覽（敬称略）

我孫子日記

—	12/20 例会
—	12/23~12/29
*	入院治療
—	12/30 退院
*2	—
—	1/1 初詣
*3	—
—	1/3 上野国立博物館
*4	—
—	1/8 SOA
—	1/11 ACC
*5	—
—	1/14 病院
—	1/15 SOA
—	1/17 例会

*膿盆(に)これが肺とぞクリスマス

悪いと(一)掻出す執刀煤払(みち)

医師来てはいつも逃げ足数(日)を(〃)

ガラス製の小さき聖樹の談話室(〃)

*2 降りしきる雨の年の瀬退院す(〃)

*3 肺欠けし我が息の音去年今年(〃)

関東のはずれに住んで初筑波(〃)

学校の孔雀に草やるお正月(〃)

陸の白鳥蹠乾き紙のやう(〃)

陸に猫居て白鳥のしらんぷり(〃)

元日の川白鳥鷗百合鷗

瘤白鳥尻をふりく吾に来る

*4 三日はや上野駅中人通り

文化会館大門松の造化梅

源氏絵の貝桶と貝展示せり

源氏香模様振袖年新た

印籠にも鼠の蒔絵お正月(みち)

犬張子一対並べ三日かな(〃)

人形のやうな子膝に初電車(〃)

*5 読初めは絵合源氏講座かな
編集後記

年末から上の句のようにあわただしい日々を送りました。みちさんの肺に癌らしきものが見つかり大急ぎで取り出してもらいこれを克服しました。四年前は救急車で駿河台のICUに入る緊急事でしたが、今回はごく普通の入院で済みました。私は時間が少しできたのだから俳句でも作りなさいよと送り出しましたら、煤払の季語を使つた上の句を見せたので強い女性だなど又思いました。

今月の源氏物語の絵合巻では源氏に詩も琴も絵もできする多岐の才能を与えて君子の理想を体現させていることと、同時代の菅家文章にある道真の平明日常茶飯事を詠った詩に詩友独留真死友があり、酒も飲めず琴も弾けない詩だけ友だと嘆いていること、パスカルのハッセにも全てのことについて少しづつ知らなければならぬとあり、論語に君子不器があることなどを知った。専門バカになるなという戒めの著者なりの表現だと思えます。

白叢一月号(通巻第一〇五号)令和二年一月十日発行

編集・発行人 光成高志 二七〇・二一九我孫子市南新木二四一七

表紙の題字…加納綾女 写真は一月十三日の白叢 (一部十)